

二〇〇一年一〇月二一日

聖なるものであること（五六）

イザヤ書第六章一節～一三節

一週あいてしまいました。今日もこれまでお話してきました、イザヤ書第六章一節～一三節に記されている預言者イザヤの「召命体験」の記事からのお話を続けます。

今日もまた、これまでお話したことに基づいて、いくつかのことをそれに積み上げることとお話を進めていきたいと思えます。そのために、かなり時間を割くこととなりますが、これまでお話してきたことを、いくつかの補足を加えながらまとめたいと思います。

イザヤが見た幻の全体をまとめる一節には、
ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。
と記されています。

ユダ王国の歴史の中でまれに見る繁栄と安定の時代を築いたウジヤ王が死んだことをとおして、ひとつの時代の終わりを感じた預言者イザヤは、ユダ王国の行く末に相当な危機感を持っていたと考えられます。実際に、その後の歴史を見ますと、ユダ王国は、主の御前に背教の道を歩み続けます。いくつかの改革の試みはありますが、ついには、バビロンの捕囚という、最終的な主のさばきを招くに至ります。そのような歴史の転換期にあつて危機感を募らせているイザヤに、主はご自身の栄光のご臨在の幻を示してくださいました。

ここで「主」は、ご自身のことを、すべてのものを所有し、御手のうちに治めておられる「アドナイ」として示しておられます。この「主」は、「高くあげられた王座に座しておられ」て、救いとさばきの御業を遂行される方です。この幻がユダ王国の問題の本質を見抜いていたイザヤに与えられた幻であれば、当然、「主」がご自身をさばき主として示されるということが期待されます。そして、そのとおりに、主はユダ王国に対するさばきが執行されるべきことを、イザヤにお示しになります。

しかし、それに先立って、主は、イザヤにイザヤ自身の現実をお示しになり

ました。具体的には、主の栄光のご臨在においてご自身の聖さを示しになることをとおして、主のご臨在の御前におけるイザヤの罪の現実を、イザヤの心の中に映し出されました。

聖なる主の栄光のご臨在を記している一節後半～四節には、

そのすそは神殿に満ち、セラフイムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわりして言っていた。

「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。」

その栄光は全地に満つ。」

その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。

と記されています。

主の栄光のご臨在の御前に仕えている御使いであるセラフイムは、身を低くして、絶えず、

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

その栄光は全地に満つ。

と告白して主を讃えています。

このセラフイムの讃美では、

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

と、「聖なる」という言葉が三回繰り返されて、主の聖さが強調されています。

主の聖さは、主がこの世界のすべてのものと「絶対的に」区別される方であることを意味していますが、それには根拠がありません。それは、主が存在と一つの属性において無限、永遠、不変の豊かさに満ちておられる方であるということです。これに対して、この世界のすべてのものは、あらゆる点において限界があります。それで、主はこの世界のすべてのものと「絶対的に」区別される方なのです。

*

前回お話ししましたように、

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

というセラフイムの讃美は、セラフイムが主の聖さに触れていることから生まれてきています。主の聖さに触れることは、主の聖さの根拠である豊かさに触れることです。セラフイムにとって、それは、主の無限の豊かさに包んでいただけでなくですが、具体的には、セラフイムには罪がありませんから、主の聖い

愛と恵みに包まれて、内側から満たされることを意味しています。それで、これは、セラフイムにとって、最も祝福された豊かな経験です。

その意味で、

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

その栄光は全地に満つ。

という讚美の言葉は、セラフイムの内側の深い充足と感動の現われです。セラフイムとしては、自分たちを包んでくださっている主の聖い愛と恵みの豊かさに対して、ひたすら主を讃えることによって応答するほかはないのです。

(後ほどお話しすることとの関連では、ここで、セラフイムが気づかっている祝福の豊かさをしっかりと心に留めておいていただきたいと思います。)

しかも、

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

というセラフイムの讚美において告白されている主に聖さの現実は、一定のところまで止まっているのではなく、常に新しく押し寄せてくる波のように、セラフイムに迫ってきて、セラフイムを圧倒しています。どうしてそうなるかと言いますと、それは、主の聖さと栄光が無限の豊かさに満ちているからです。この、主の無限の豊かさは、あらゆる点において有限なセラフイムにとっては、常に新しく新鮮なものとして迫ってきます。それで、それに呼応して生み出されているセラフイムの讚美も、常に新鮮な感動と充足に満ちているものとなっているのです。

このことは、やがて、私たちにとっても現実のこととなります。私たちは、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって成し遂げられた罪の贖いにあずかって罪を赦され、永遠のいのちを与えられています。それで、世の終わりのイエス・キリストの再臨の日には、私たちもイエス・キリストの復活の栄光にあずかってよみがえるようになります。それによって、栄光の主のご臨在の御前において、顔と顔とを合わせるようにして主との交わりを経験するようになります。ヨハネの手紙第一・三章二節に、

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかになされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

と記されているとおりです。

その日には、私たちは主の聖さの根拠である無限、永遠、不変の愛と恵みの豊かさに包まれるようになります。それが私たちに与えられている永遠のいのちの内実です。永遠のいのちはただ時間的にいつまでも続くというだけのものではなく、そのような内実をもっているのです。この永遠のいのちにある主との交わりにおいては、主の聖なる愛と恵みが永遠に私たちを包んでくださいます。私たちにとっては、その主の聖なる愛と恵みは、常に新しく新鮮な現実となつて、私たちを内側から満たしてください。しかも、それが永遠に続いて、決して色あせてしまうことはありません。その意味では、私たちの内側からは、主の聖さを讃える讚美が絶えることなくわき上がってくるはずです。

*

このようなセラフィムの祝福された状態に比べて、イザヤは、聖なる主の栄光のご臨在に触れた時に、自分が直ちに滅ぼされるべきものであることを、動かしがたい納得とともに、感じ取りました。それで、五節に記されていますように、

ああ。私は、もうだめだ。

私はくちびるの汚れた者で、

くちびるの汚れた民の間に住んでいる。

しかも万軍の主である王を、

この目で見たのだから。

と叫びました。

少し前にお話ししましたように、

私はくちびるの汚れた者で、

くちびるの汚れた民の間に住んでいる。

という叫びは、自分は主を讃えることができないう者であるという現実を告白するものです。

そこにセラフィムとの決定的な違いが見て取れます。セラフィムのうちからは、深い充足とともに讚美が生み出されるのですが、イザヤのうちからは、自分が滅ぼされるべき者であることの自覚とともに、

ああ。私は、もうだめだ。

という絶望の叫びがわき上がってくるだけでした。

それは、主の聖さの現実がイザヤを圧倒してしまっているからですが、その主の聖さは、やはり、常に新しく押し寄せてくる波のように、イザヤを新たに

圧倒し続けることになります。前回お話ししましたように、もし、主が、直ちに、セラフイムを遣わしてください、

見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、

あなたの不義は取り去られ、

あなたの罪も贖われた。

という贖いの恵みを示してください。さらなかつたとしたら、イザヤの絶望は、どんどん深くなって行って、イザヤ自身が内側から壊れてしまっていたことでしょう。その行き着くところは地獄の苦しみです。

しかし、主は、イザヤを絶望の渦に引き込まれるままに放置しないで、直ちに、セラフイムのひとりイザヤのもとに遣わしてくださいました。六節、七節には、

すると、私のもとに、セラフイムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があつた。彼は、私の口に触れて言った。

「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、

あなたの不義は取り去られ、

あなたの罪も贖われた。」

と記されています。

イザヤは、自分が滅ぶべき者であるという現実を、動かしがたい納得のうちに思い知らされます。それで、セラフイムのひとりが「祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭」を持って自分の方にやって来た時には、自分が焼き尽くされてしまうことを直感したはずですよ。

そのイザヤに、

見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、

あなたの不義は取り去られ、

あなたの罪も贖われた。

という贖いの恵みが告げられました。これは、イザヤにとっては、本当に深い驚きであつたはずですよ。

*

以上が、これまでお話ししてきたことのまとめですが、このこととの関連で考えたいのは、このような主のご臨在の御許に備えられている贖いの恵みにあらずかつたイザヤの祝福のことですよ。

これまで、繰り返しをいとわず、主のご臨在の御前で主の聖なる栄光を讃えているセラフィムに与えられている祝福を考えてきました。それによって、セラフィムがあずかっている祝福の豊かさを、改めて、心に留めておいていただきつつあります。セラフィムは、主の聖さの根拠である無限、永遠、不変の愛と恵みの豊かさに包まれています。そして、それが常に新しく新鮮なものとしてセラフィムを圧倒しているので、セラフィムはそれに呼応して、絶えることなく、

聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

その栄光は全地に満ち。
と讃美し続けています。

一方、イザヤは、聖なる主の栄光のご臨在に触れたときに、自分が直ちに滅ぼされるべきものであることを、動かしがたい納得とともに感じ取りました。そして、

ああ。私は、もうだめだ。

と叫びました。しかし、そのイザヤが、主のご臨在の御許に備えられている贖いの恵みにあずかったのです。

それによって、イザヤも、セラフィムと同じような祝福にあずかるようになっていくことが察せられます。事実、セラフィムは、主の栄光のご臨在の御前に仕えている御使いで、救いとさばきにかかわる主のみこころを、直ちに実行に移すための態勢にありました。一方イザヤを見ますと、八節に、

私は、「だれを遣わそう。だが、われわれのために行くだろう。」と
ておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を
遣わしてください。」

と記されていますように、イザヤも、救いとさばきにかかわる主のみこころを果たすために、主のご臨在の御前から遣わされるようになりました。

*

そうであるとしても、イザヤはセラフィムと同じ祝福にあずかるようになっていけるのでしょうか。

ここに、私たちが身を低くしつつも、心を開いて受け止めなければならぬことがあります。それは、イザヤは、セラフィムがあずかっている豊かな祝福にはるかにまさる祝福にあずかっているということなのです。

これまでお話ししてきましたセラフィムの祝福の豊かさを考えますと、イザ

ヤがそれにまさる祝福を受けているということは、にわかには信じられないことでしょう。そのことについてお話ししたいと思います。

ご承知のように、セラフイムは、罪を犯したことがありません。それで、常に聖なる主の栄光のご臨在の御許で、主の愛と恵みの豊かさに触れながら主を讃えつつ、主に仕えています。セラフイムは、そのような立場から落ちたことがありません。それは本当に幸いなことです。

これに対して、「神のかたち」に造られている人間は、神さまに対して罪を犯し、御前に墮落してしまいました。イザヤはその現実を、栄光の主のご臨在の御前で自分の滅びの实感とともに思い知らされました。それは、イザヤにとっては、絶望の叫びを叫ぶほかのない、恐ろしい経験でした。

しかし、そのイザヤは、主のご臨在の御許に備えられている贖いに込められている主の聖なる愛と恵みの現実に触れました。これは、セラフイムにとつては、自分たちの内側を満たすものとして経験することができないものです。

セラフイムは、主のご臨在の御許に備えられている贖いが、自らの罪の恐るべき現実に撃たれて、絶望の叫びをあげるほかはなかつたイザヤを包んで、その罪を聖めて主のご臨在の御前に立つことができるようにしてくださったことをしっかりと見届けています。当然、そのことに表わされている主の愛と恵みの深さを理解することもできたはずですが、しかし、その愛と恵みはイザヤに注がれており、イザヤを滅びの中から救い出し、内側から聖めて、生かしているものです。セラフイムは、それを、イザヤのように、自分自身の現実としては経験することができないのです。

先週お話ししましたように、やがてイザヤは、聖なる主の栄光のご臨在の御許に備えられている贖いが、どのようにして確立されるものであるかを悟るようになります。

それは、五二章一三節の、

見よ。わたしのしもべは栄える。

彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。

という言葉から始まって、五三節一二節までに記されている、「苦難のしもべ」の預言においてあかしされていることです。すでにお話ししたことです。結論的に言いますと、六章一節で「高くあげられた王座に座しておられる」とあかしされている「主」ご自身が、「ご自身の民の罪と咎のために苦難を経験し、ご自身のいのちを注ぎ出してくださいることによって、贖いを成し遂げてくださ

るということですが。

聖なる主の栄光のご臨在の御前で、自分の罪の現実を思い知らされて、絶望のどん底から叫び声をあげたイザヤにとって、それは、そのような絶望的な状況にある自分を生かしてくださる主の聖なる愛と恵みです。栄光の主が、ほかならぬこの自分のために、死の苦しみを味わってください、贖いを成し遂げてくださるということです。しかし、セラフイムにとっては、そのことは、まことに衝撃的なことではありませんが、自分のためのことではありません。

聖なる主の栄光のご臨在の御前において、セラフイムとイザヤは対照的な立場にありました。セラフイムは主の聖なる愛と恵みに包まれて、絶えず讃美をささげるほかはない状態にありましたが、イザヤは、自らの罪の恐るべき現実を知って、絶望の叫びを叫ぶほかはありませんでした。

それが、聖なる主の栄光のご臨在の御許に備えられている贖いにおいて、イザヤは、セラフイムが受けている愛と恵みにはるかにまさる愛と恵みを、主から受けることになりました。栄光の主ご自身が、罪に満ちたものである自分のために死の苦しみを味わい、いのちを注ぎ出してくださいることに示されている愛と恵みです。

セラフイムとイザヤの間には、なんの競争心もライバル意識もありません。そのことを踏まえたうえでこのような言い方をしますと、聖なる主の栄光のご臨在の御許に備えられている贖いにおいては、イザヤとセラフイムの間に、ある種の逆転が起こりました。イザヤは、セラフイムに与えられている愛と恵みにはるかにまさる、主の愛と恵みを経験するようになりました。

このことは、そのまま私たちの現実となっています。へブル人への手紙二章一四節〜一六節に、

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によつて、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。

と記されているとおりです。

*

ここに、一つの疑問が湧いてきます。それは、主の聖さの根拠である無限、永遠、不変の豊かさがセラフイムを内側から満たしているのであれば、それに

まさる祝福によって満たされるといふことはあり得ないのではないか、という疑問です。あるいは、主のご臨在の御許に備えられている贖いをおしてイザヤに示された愛と恵みが、聖なる主の無限、永遠、不変の豊かさの現われであるといふのであれば、それは、セラフイムが気づかっている豊かさと同じものなのではないかということなのです。

このことをどのように理解するかはお分かりのことかもしれませんが、今お話ししたこととの関連で、もう一つの問題を考えるために、確認しておきましょう。

確かに、主の聖さの根拠となっている豊かさは無限、永遠、不変の豊かさです。そして、セラフイムはその無限、永遠、不変の豊かさの中から、祝福を受けています。しかし、セラフイムはあらゆる点において有限な存在ですから、主の無限、永遠、不変の豊かさをすべてそのまま受け止めることができるわけではありません。

たとえ神さまの愛であつても、その無限、永遠、不変の愛の栄光は無限、永遠、不変です。どのような被造物も、その無限の栄光に耐えることはできません。神さまの愛をそのまま受け止めることができるのは、三位一体の御父と御子と御霊の間においてだけです。それで、神さまの愛は、その無限、永遠、不変の豊かさの中から、セラフイムが受け止めることができる分だけ与えられます。そのために、セラフイムにとって、主の聖さと栄光に満ちている愛と恵みは、無限、永遠、不変の豊かさを源として、絶えず押し寄せてくる波のように、常に新しく新鮮な現実として自分たちを圧倒しているということになります。

同じことは、主のご臨在の御許に備えられている贖いにあずかったイザヤについて、また、私たちについても当てはまります。私たちは、主の無限、永遠、不変の愛と恵みの豊かさを、そのまますべて受け止めることはできません。また、そのすべてを受け止めてしまうというようなことは、永遠にあり得ません。主はご自身の無限、永遠、不変の豊かさの中から、私たちが受け止めることができる限りの愛と恵みを、惜しむことなく与えてくださいます。それで、主の愛と恵みは、永遠にわたって常に新しく新鮮なものとして、私たちを包んでくださいます。

*

それでは、セラフイムとイザヤを初めとする私たちの違いはどこにあるのでしょうか。それは、聖なる主の栄光のご臨在の御前における立場の違いにあり

ます。

セラフイムを初めとする御使いたちは、創造の御業によって造られたときの栄光をもち続けます。それは「仕える霊」としての立場です。ヘブル人への手紙一章一四節に、

御使いはみな、仕える霊であつて、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたものではありませんか。

と記されているとおりです。

これに対して、人間は、神さまの永遠の聖定の中で、神さまの子どもとなるように定められています。エペソ人への手紙一章四節、五節に、

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもつてあらかじめ定めておられたのです。

と記されているとおりです。

この「永遠のみこころ」は、神さまが創造の御業において人間を「神のかたち」にお造りになったことによつて、実現の第一歩を踏み出しました。そして、人間が神さまに対して罪を犯して御前に墮落してしまつた後には、イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによつて成し遂げられた罪の贖いをおして、私たちの間に実現しています。それは、世の終わりのイエス・キリストが再臨される日に、最終的に完成します。先ほど引用しましたところを含みますが、ヨハネの手紙第一・三章一節、二節に、

私たちが神の子どもと呼ばれるために、—— 事実、いま私たちは神の子どもです。—— 御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかになっていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

と記されているとおりです。

セラフイムを初めとする御使いたちは「仕える霊」としての立場にとどまります。これに対して、イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによつて成し遂げられた罪の贖いにあずかっている私たちは、「神の子ども

も」としての特権と栄光において、栄光の主である「キリストのありのままの姿を見る」者とされます。

言い換えますと、セラフイムは、常に、聖なる主の栄光のご臨在の御前におい

て、彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい

と言われている状態にあります。これに対して、神の子どもとされている私たちは、聖なる主の栄光のご臨在の御前において、主と顔と顔を合わせてまみえるようになるのです。このことのうちに、セラフイムが受けている祝福と、私たち神の子どもが受けている祝福の違いがあります。

繰り返しになりますが、そうであっても、そこには競争心やライバル意識はまったくありません。セラフイムは、恐るべき罪の現実の中で絶望の叫びを叫ぶほかはなかったイザヤと、それと同じ状態にあった私たちを、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによる贖いによって、死と滅びの中から救い出し、ご自分の子としてくださったことに示されている神さまの愛と恵みを見届けて、その讚美を一段と深めているはずです。

幻の中ではありましたが、聖なる主の栄光のご臨在の御許に備えられている贖いにあずかったイザヤは、このことに表わされている神さまの愛と恵みの豊かさにあずかるようになったのです。

*

最後に、このことから先ほど触れました一つの問題についてお話ししておきましょう。

主の思いがけないあわれみによって贖いに包まれるようになったイザヤは、セラフイムが自分のこととしては経験することのできない、主の愛と恵みにあずかっています。その愛と恵みは聖なる主の栄光のご臨在の御許に備えられている贖いのうちにあつてイザヤを満たしています。

このことを、現われた形だけで見ますと、もしイザヤに罪がなくて、聖なる主の栄光のご臨在の御前において、

ああ。私は、もうだめだ。

という絶望の叫びを叫ぶことがなかったとしたら、イザヤはこのような主の愛と恵みを経験することができなかったということになります。そうしますと、イザヤは自らのうちに罪を宿していて、聖なる主の栄光のご臨在の御前において滅ぶべき者であったから、このような愛と恵みにあずかったのではないかと

いうような気がしてきます。つまり、このような主の愛と恵みを経験するためには、イザヤは罪を犯して墮落していなければならなかったのではないだろうか、というようなことです。

私たちは、このような「論理」の「わな」に気をつけなければなりません。イザヤを初めとして、私たち神の子どもが受けている主の聖なる愛と恵みは、決して、私たちの罪が神さまに働きかけて、神さまから引き出したものではありません。私たちの罪は、ただ、神さまの聖なる御怒りに相当し、実際に、神さまの御怒りを引き出すだけです。

主の聖なる愛と恵みは、私たちが神さまに罪を犯して御前に墮落してしまつたにもかかわらず、神さまが私たちに示してくださいましたものです。神さまは、ご自身の永遠の聖定において、私たちをご自身の子として御前に立たせてくださるよう定めてくださいました。そして、その「永遠のみこころ」を、私たちが罪を犯して墮落してしまつた後にも変えることなく、実現してくださいました。そのためには、御子が私たちの贖い主となってくださいと、私たちに代わって死の苦しみを味わってくださいることをとおして私たちの罪を贖ってくださいる必要があります。それでも、神さまは、私たちをご自身の子として御前に立たせてくださるというみこころを実現してくださいましたのです。

ですから、イザヤを初めとして私たちが、セラフイムも自分のこととして経験することがない、主の愛と恵みに包まれるようになったのは、私たちが罪を犯したからではありません。その主の愛と恵みは、私たちが罪を犯して墮落してしまつたにもかかわらず、神さまが私たちをご自身の子として御前に立たせてくださるといふ「永遠のみこころ」を、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって成し遂げられた贖いの御業をとおして実現してくださいましたから、私たちに与えられているのです。